

新年度を迎えるにあたって ～WBCから学んだこと～



今年もまた、新たな生命の息吹を生み出す清々しい季節が到来しました。新入生や新入社員たちが胸はずませて新たな社会へと飛び立つ季節であり、私たちの周囲にはフレッシュなエネルギーが満ち溢れています。とりわけ今年は、長く続いたコロナの呪縛から解放され、新しい社会が始まる！そんな期待に胸はずむ思いがします。私たち錬聖会にとっても新たな歩みを始める時機と捉え、今日から始まる2023年度をさらに創造的で挑戦的な空手道場へと発展させる足掛かりの年にしたいと考えています。ともに練習する道場生はもとより、保護者の皆さまをはじめ関係各位のご支援ご協力をお願いいたします。

さて、3月下旬、WBC(WORLD BASEBALL CLASSIC)での日本チームの活躍に日本中が沸いたことは記憶に新しいところです。それまで野球に興味のなかった方まで“俄か 侍ジャパンファン”になった今回のWBCですが、何がここまで日本中を熱狂させたのでしょうか。もちろん、母国が勝つことの爽快感が大きな理由であることは言うまでもありませんが、実は日本チームと対戦して負けたチームまで日本チームを褒め讃えるという不思議な現象が起きています。日本チームを宿敵として、専ら辛辣な批判を繰り返してきた韓国チームや同国民までもがそうなのです。日本チームの戦い方や雰囲気、組織運営の在り方に野球というスポーツを超越した“理想”があり、万国共通の“憧れ”の対象となったのではないかと、私は感じています。とくに、20年あまりのゼロ成長から脱却を目指す我が国の在り方について、重要なサジェスションを得たような気がします。自分の力を信じ、仲間を信じ、常に前向きな気持ちで強敵に向き合っていく・・・そう、昨今の日本が忘れていた感覚です。しかし、それらは決して“から元気や虚しい自信”ではなく、その自信の基盤となっている選手一人ひとりのしっかりとした“基本力”の高さが見えるから、“優勝・世界一”という結果を素直に理解できるのです。



1. 異質の個性を認め、育む組織

元々、日本の野球の強みは「全員野球」にある！と言われてきました。今回のWBCもこの言葉が当てはまるでしょうが、かつての全員野球が自己の個性や主張を抑えて「同質のまとまり(10+10=20)」を志向していたのに対し、今回は「異質の個性がぶつかりあって出来たハイブリッド集団(10×10=100)」だったように思えます。大谷、ダルビッシュ、吉田、ヌートバー選手などのメジャーリーガーたちが異質の文化をもって参戦したことによってチームに化学反応が起きたのでしょうか。日本でプレイする選手たちはこれらの選手に良い意味で感化され、試合を重ねるごとに目に見えて成長していました。そのことが優勝を勝ち取った原動力となったことは間違いありません。

2. コンピテンシー理論

コンピテンシー(※)の高い日本人メジャーリーガーの果たした役割は大きい。自分を信じ、常にポジティブな精神状態でプレイする彼らのスタイルは、野球に限らず、ビジネスでも必須の成功要件です。が、最も重要なことは、自分を信じるに足る“理論づけられた実績の存在”です。つまり、単に一生懸命練習した! というだけではなく、このようにすれば一流選手になれる! という結果から逆算して達成した実績なのです。例えば、あらゆる運動の基礎となる「①体幹(目的とするスポーツに適した筋肉やバランス感覚等)」、そのスポーツに必要な「②スキルの習得(専門的な理論に適った反復練習)」、さらには実戦力を養い高めるための「③体験の蓄積(再現性の高い経験への進化)」・・・これらを具体的な練習メニューやタイムスケジュールに落とし込んでストイックに取り組むことでコンピテンシーを磨くことができるのです。一般的に、日本では上述②(スキルの習得)への偏重があり、①(基礎力)と③(体験の蓄積)が圧倒的に不足していると言われています。だから、一流を目指す人材は海外へと流出するのです。それは優秀なビジネスパーソンや政治家の育成にも当てはまることです。たとえ、それぞれの会社や政党で特有のスキル(出世の仕方など)を身につけたとしても、それは熾烈なグローバル競争には何ら役立つものではないのです。

※コンピテンシー(competency) : 高い業績を挙げる人材に共通する能力(行動特性・適性)。

competency は compete(競う)の名詞形で、元来、競争力を意味する。

3. チームビルディング

組織作りや組織運営についても学ぶべき点があります。もちろんチームの中核をなすのは20歳代後半の大谷世代(大谷、近藤、吉田、源田、岡本等)ですが、次代を担う20歳代前半の若手(村上、佐々木、戸郷、高橋等)がうまく組み合わせられており、そこにダルビッシュや甲斐といった30歳代の選手たちが自分たちの豊富な技量と経験を実戦の場で伝授していく、まさに組織のサクセッション(強さの継承)を前提とした布陣といえます。また、予選ラウンドで深刻な不振が続いた村上選手を使い続けた監督の采配が準決勝での決勝打と決勝戦での同点ホームランを生み出し、若い村上選手の今後の野球人生にとってかけがえのない財産になったでしょう。まさに、“チームビルディング”と“チームワーク”が両輪として機能した模範例と言えると思います。

前述の観点は、空手の修練についても同じことが言えます。真に空手道を目指すには、見た目の技(スキル)の練習ばかりではなく、その技に必要な体幹を作り、呼吸使いを習得した上で、身体の細胞に埋め込むまでストイックに繰り返し練習することが肝要です。そしてその厳しい修練の道りをして、自分の力を信じられるところまで実戦(体験)によって裏付けていくことが『空手道(空手の道)』なのです。だから、空手道に引退はありません。高齢になっても続ける、いや続けなければ目的地にたどり着けないほど長い道りです。けれど、いつからか、自分の人生と同化し、なくてはならないものになっている・・・そんな風に感じる今日この頃です。

2023年 4月 1日

日本空手道錬聖会
会長 森 拓生

